

胎児環境研究班における 疫学的研究について

坂元正一(東大産婦人科)

1. 流早死産の疫学的研究

大阪堺金岡地区における早産、死産例について、堺金岡保健所に届出られた死産届、出生票と指導票カードより分析した。

第7～9カ月の早産は89例で出生票(3,306)に対し2.51%(第7カ月0.15%, 第8カ月0.51%, 第9カ月1.85%)に相当し、第9カ月が大部分(75.3%)を占めていた。

これに対し死産は37名(死産率1.14%)あり、第7カ月が最も多く、(62.2%), 第8カ月、第9カ月の順で早産例と対照的であった。

児の平均体重は妊娠第7カ月1,194g, 第8カ月1,464g, 第9カ月2,287gであった。2,000g未満は101名中47名で、うち生産は30名、死産は17名であった。2,000g以上では53名が生産、1名が死産であった。

世帯主の職業は勤労者世帯(35.7%), 臨時日雇(35.7%), 自営(13.6%)などであった。死産例は臨時日雇に多く43.3%もあり、勤労世帯の4倍以上であった。

早産、死産の場所としては病院、診療所が最も多く、88.1%を占め、助産所4.0%, 自宅がこれについていた。

妊娠中つわりのあったものは18.8%, 疾病に罹患していたものは12.5%, 過労12.5%, 栄養に問題あったもの6.3%であった。分娩は早期破水例33.3%, 多胎5.6%, 骨盤位11.1%, 前置胎盤8.3%であった。

2. 異常内分泌環境下卵による心身障害発生の 疫学的研究

(1) 高年令妊娠

昭和48年1月より昭和51年12月までの4年間における満35才以上の高年産婦928例を対象とし後方視的調査を行なった。

早産は対照に比し高年産婦に多かった。

帝切の頻度が高年産婦に高く、分娩時出血量も

多かった。

高年産婦では妊娠中毒症、低体重児出生が多かった。

ダウン症候群は928例中2例みられた。

高年産婦では晩婚が多くみられた。

(2) 排卵誘発妊娠

昭和47年1月より昭和51年12月までの4年間にクロミッド療法により妊娠した135例を対象とし後方視的調査を実施した。

135例中流産は29例(21.5%), 早産は9例(8.5%)であった。外表奇形は1例(兔唇)にみとめられた。

出生児108例中男児63名、女児36名(記載不明9例)と男児が多かった。

(3) 経口避妊薬服用後妊娠

昭和48年1月より昭和51年12月までの4年間におけるピル服用後妊娠89例を調査対象とした。ピル内服期間は 10.1 ± 7.7 カ月であった。内服中止より終経までの期間は平均5.5カ月であった。89例中10例は人工流産、3例は自然流産した。76例が出産し、双胎は2例であった。外表奇形は認められなかったが、2例はダウン症候群であった。

(3) 風疹に関する研究

別紙参照のこと。(小児慢性疾患研究班報告)

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1. 流早死産の疫学的研究

大阪堺金岡地区における早産,死産例について,堺金岡保健所に届出られた死産届,出生票と指導票カードより分析した。

第7~9カ月の早産は89例で出生票(3,306)に対し2.51%(第7カ月0.15%,第8カ月0.51%,第9カ月1.85%)に相当し,第9カ月が大部分(75.3%)を占めていた。